

『学会見聞記』

第8回ヨーロッパ脳腫瘍学会 8th Congress of the European Association for Neuro-Oncology (EANO)

吉 田 優 也

金沢大学大学院医学系研究科脳医学専攻

脳・脊髄機能制御学

(脳神経外科学)

博士課程4年

2008年9月12日から14日にかけて、スペインのバルセロナにて開催された第8回ヨーロッパ脳腫瘍学会に参加しました。ヨーロッパ脳腫瘍学会は世界で最も規模の大きい脳腫瘍関連学会の1つで、今回も世界中の脳腫瘍に関する臨床・研究に携わる1000名以上の医師、研究者が参加しました。

9月10日、フィンランドのヘルシンキを経由してバルセロナに到着しました。今回は初めての国際学会ということもあり出発当日から緊張気味でしたが、地中海に面したバルセロナの、スペインらしい晴天の下、旅の疲れも緊張も一瞬にして吹き飛びました。この時期のスペインは高温、晴天の日が多く、Tシャツ1枚で十分で、日本ほど湿気がないので過ごしやすく感じました。ガウディ建築、フラメンコ、闘牛と、見どころにあふれるバルセロナですが、なかでも19世紀末にバルセロナを席卷した世紀末芸術の代表であるガウディ建築は、多くが世界遺産にも登録されています。学会前日にサグラダ・ファミリア聖堂、グエル公園などのガウディ建築の代表作を巡り、今なお斬新なスタイルに圧倒されました。ガウディの世界に触れた人は皆、「ガウディは、子供心を失っていない天才だ!」と一様に言いますが、まさしくその言葉に尽きると思いました。また、パエリアなどの名物料理を代表とする本場のスペイン料理を堪能できたのもよい思い出です。バルセロナは、スペインの長い歴史が育んだ独特の文化と、風光明媚な土地柄に惹きつけられた観光客で非常ににぎわい、私も忙しい日常を離れ大変に満喫できました。

今回、私は幸運なことにポスター発表をする機会に恵まれました。題目は「Sphingosine-1-phosphate1 receptor correlates with survival of patients with glioblastoma: roles of sphingosine-1-phosphate1 receptor in growth of glioblastoma cell lines.」です。内容を概略しますと、スフィンゴシン1-リン酸受容体(sphingosine-1-phosphate receptors; S1P₁~S1P₅)は、細胞増殖調節、抗アポトーシス、細胞運動調節のプロセスに関与している脂質代謝産物S1Pに特異的な受容体ですが、われわれは、神経膠腫においてS1P受容体ファミリーの発現と機能を検討したところ、5種類のS1P受容体のうち、S1P₁受容体の発現レベルが最も悪性型の神経膠芽腫において正常脳組織に比し有意に低いことが分かり、また、神経膠芽腫症例においてS1P₁受容体低発現群が生存予後不良でした。神経膠芽腫細胞株においてS1P₁受

容体強制発現細胞株では増殖能が低下し、発現抑制細胞株では増殖が促進されました。以上の結果より、神経膠芽腫におけるS1P₁受容体は細胞増殖制御分子としての機能を有し、予後規定因子となりうると考えられました。ポスター発表の時間は学会1日目の14:30~15:30までの1時間でした。簡単な英語のコミュニケーションもままならない私にとって、この1時間はとても長く感じられましたが、なんとか無事に乗り切ることができました。

今回、ヨーロッパ脳腫瘍学会に参加して、最先端の脳腫瘍研究に触れることができ、自分自身の今後の臨床・研究に非常に大きなヒントを得ることができました。また、今回の学会のプレナリーセッションで座長・発表者を務められたフランス・リヨンのWHO、国際癌研究機構の大垣比呂子先生と一緒に昼食を摂りお話を伺う機会が得られたことも、大変よい経験となりました。次回は2年後にオランダのマーストリヒトで開催される予定ですが、再び参加できるよう今後も臨床・研究に努力していこうと思いました。

